

屋上同好会
藤あさや

【テキスト中に現れる記号について】

《…ルビ》

(例) 宙窩《ソラカ》

「#」…入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) 「#」ベテルギウス」に傍点」

屋上には宇宙のロマンがある。

宇宙塵。文字通り、宇宙の塵だ。地球には毎日毎日宇宙からの物質が降り注いでいる。流星や隕石だ。石のまま落ちてくれば隕石。燃え尽きてしまったものは灰となり塵となる。毎年数万トンが地表に落ちてきている。

ぼくは宇宙塵の採集をしている。

マンシヨンやビルの屋上に出ると床にざらざらした灰のような砂埃のようなものが積もっている。これが宇宙塵だ。もちろん土ぼこりや黄砂、火山灰も混じっているし、人の生んだ塵も混ざっているかもしれないし、原発から出た芳しくないゴミかもしれないけれど、宇宙由来の塵だっけ入っている。確実にだ。小惑星探査機が塵を持ち帰ってニュースになったけれど、身近なところにも宇宙由来の物質はあり、簡単に手に入る。これはすごいことのはず——なのだけれど、理解してくれる人はあまりいない。

——まあ、いいさ。ぼくだって連中はわからない。

コンクリートの廃墟の下に立つと人の声が降ってきた。べんたらべんたらすべーすびーぶる。UFOコンタクターだ。今ではどこの建物も簡単には屋上に入れない。それで屋上師は廃墟に集う。

——騒々しいな。

今回目当ての建物はこのあたりで唯一屋上のある元消防署だ。

——隣の訓練塔にしよう。

高所訓練のための塔が本棟とは別に建てられていた。距離も適度に離れていて騒がなければUFOコンタクターたちに見つかかることもないだろう。ほとんど階段だけでできた箱形の塔を上り屋上に出た。荷物を下し、テントを立てる。アルミ蒸着シートを広げて固定する。風もあまりなく、花粉や埃は昨日の雨で大気から一掃されているはずだった。

絶好の宇宙塵日和だ。

屋上に降り積もった宇宙塵をそのまま採集しても良かったが、ぼくは新鮮な宇宙塵が好きだった。空から舞い降りてきたばかりの宇宙塵は顕微鏡で覗いた姿も凜々しいものが多い。地表にとらわれ雨風に晒された宇宙塵は角が落ちて宇宙塵らしさが薄くなってしまふのだ。何より、シートを広げて待てば時間あたりの降塵量が観測できる。いつ、どこで取れたものであるかの記録が重要なのは昆虫や化石と変わらない。

無線機を設置する。HRO受信機と呼ばれる流星観測専用の自作受信機だ。これにアンテナとバッテリー、ノートパソコンを接続すればテントの中は即席の電波天文台になる。遠くのアマチュア無線局から発せられた電波が、流星によって引き起こされた「電離」という現象で反射され、ぼくの元に届けられる。そうして受信した電波をパソコンで処理することと流星のカウントができる。天候も昼夜も問わない流星観測だ。採集した宇宙塵と電波観測の間に相関関係を見つけれれば、立派な科学となる。

観測準備を整えて一息ついた。

「べんとうらべんとうら」と独り言ちながら弁当を広げる。箸を使う間にもHROのエコーが入ってきた。姿も音もなかったけれど遠くの飛行機のものだろう。電波的にも観測日和であるらしい。

UFOコンタクターは延々と「べんとうらべんとうら」を唱え続けていたけれどUFOは現れなかった。ぼくは三時間おきに湿らせた濾紙でアルミシートを拭き、無線機の信号に耳を傾けながら本を読んでいた。夜の八時くらいだろうか、コンタクターの一人がやってきて缶ビールを分けてくれた。笑顔の印象的な二十歳くらいの女の子だった。ぼくはちょっとだけUFO信者たちに好感を持つようになった。

今回の流星観測は大成功に終わった。流星群というほどではなかったけれど流星の数は多かったし、二分半も電離層を維持する「ロングエコー」も捉えていた。シートに降った埃も多く、ぼくにとっては大満足の週末となった。

この消防署の廃墟はぼくのお気に入りとなった。廃墟では人と会うことは珍しかったけれど、この消防署跡では数回に一度、UFOコンタクターたちと遭遇した。そして、幾度めかの観測でおかしなことに気づいた。

——多過ぎる。

コンタクターたちの集まる日に限って流星の出現数が多く、採集できた宇宙塵の量も多かった。同じ消防署跡地でもコンタクターたちの現れない日・時間帯は流星も宇宙塵も「並」でしかない。

流星の出現を予測するのはとても難しい。彗星の通過した軌道を地球が横切るときであれば流星群として予測できなくもないけれど、コンタクターたちと鉢合わせた日にはこれといった流星群の予報もなかった。彼らがなぜ流星の多い日に限って集まっていたのかは謎だった。

——本当にUFOを召喚できていたとか？

HROは流星だけでなく人工の飛翔体も補足する。ドップラー効果の検出によって飛行機やロケットの識別もできた。アクティブなレーダーと違って確実性は低かったけれど、飛翔体は速度が上がれば上がるほど、小さければ小さいほど流星の残すエコーに似る。最長のロングエコーは四分五十二秒。HROにおいては超大物だ。飛行機の届かない高高度でロケットの打ち上げ情報もない。

——まさか、ね。

でも、とぼくは首を傾げる。コンタクターたちと鉢合わせた日の宇宙塵は一風変わっていた。重金属の成分が普段の採集試料よりずっと濃いのだ。また、ヘリウムの含有量も多かった。重金属は太陽系外起源を示唆しているはずだったし、ヘリウムは宇宙由来物質である可能性を示していた。もっと専門的な設備や知識があればより詳しいことまでわかるかもしれないけれど、ぼくのような一介の宇宙塵収集家——屋上師にはこれ以上のことはわからない。

ぼくは今回もいつものように消防署跡地を訪れた。今回もまたUFOタンククターたちが本棟の屋上でUFO召喚を試みているらしい。べんとり、べんとり、と声が降ってきた。

——彼らはどうやってここに来ているのだろう。

足となる乗り物が見当たらないことに、初めて気づいた。崩壊しかけた線路跡は四輪では進れない。オフロードバイクでもちよつとばかり苦労する道のりだ。国道から徒歩でアプローチしているのだろうと思ったけれど、道沿いで駐車スペースになりそうな場所には車もなかった。

いつものようにビールとつまみを持ってきてくれた娘さんに訊ねてみる。すっかり顔馴染みだ。

「皆さんはどちらからいらしてるんですか？」

「遠くからです」

「廃線を歩いて？」

「いいえ。近道があるんです」

ビールは冷えて汗をかいていた。クーラーボックスに入れて徒歩で運んでいるとしたら大仕事だろう。オートバイのぼくでさえ観測機材で手一杯で冷えた飲み物を持ち込む余裕は持てない。

「UFOを呼んでいらっしやる……んですよね？」

「ふふ。秘密です」

隣の建物からコンタクターたちの念仏のような声が流れてきた。

「流星はたくさん捉えられていらっしやいます？」

聞き返してきた彼女は笑顔だったけれど少し悲しげに見えた。

「はい。あなたたちとここで遭遇する日は、なぜか決まってたくさん出現するんです」

傍らのHRO受信機が「ぴいーい」と流星らしい入感を示した。彼女が目を見せる。

「星の、断末魔ですね」

「……ええ」

ぼくは少し驚いた。彼女の言葉が流星観測についての正しい理解を示していたからだ。アンテナと電子機器を持ち込んでいるぼくなどUFO信者の彼女たちにとっては政府の監視機関くらいにしか見えないのではないかと思っていたのだけれどそうでもないらしい。その日はこれまでも増して流星の数が多かった。夜が近づくに連れて流星はさらに数を増していく。日が落ちてみると肉眼でもいくつも流星が観測できた。

——流星群の予報はなかったはずだが。

零時が過ぎてオリオンが姿を見せる頃にはコンタクターたちの声はさらに熱を帯びた。

開けて翌日の日曜日、いつもならば午前中に仮眠を取り、午後には撤収するのだけれど今回は月曜まで休みを取ってあった。HRO受信機はなおも流星のカウントを続けている。「あら。もしかして今晚もお泊まりですか？」

消防署の裏に据えられたポンプ井戸で水を汲んでいると顔なじみになったコンタクターの彼女が声をかけてくる。

「ええ。昨晚は流星がたくさん見れましたよ。今晚も見られるといいなあ」

「見れますよ」

彼女がきつぱりと笑う。

「え？」

「今晚は昨晚よりもずっとたくさん、星が降ってきます」

「……わかるんですか？」

「はい。夜になったら本棟で観測しませんか。真夜中近くに、面白いものが見られます」

HRO受信機は時間の経過とともにますます頻繁に鳴りはじめ、日が暮れてからは流星雨と呼んで良いくらいの流れ星を肉眼でも観測できるようになった。ぼくは戸惑いを覚えながらも昨夜の彼女の招きに応じることにした。赤セロファンのペンライトを頼りに零時を回った消防署本棟の階段を上る。

——静かだな。

夕方までは確かに「べんとらべんとら」という集団の声が降ってきていたのだけれど、今は人のいる気配さえない。

——こちらの建物は初めてだ。

外階段から上がった屋上は気配どころか本当に人の姿がなかった。こんばんは、と声をかけてみても反応がない。広い屋上の真ん中にぼつんと木のベンチがあり、汗をかいた缶ビールが置かれていた。

——からかわれたかな？

ビールを重しにメモが一枚。

『Ventr'a』は故郷を懐かしむ言葉です」と書かれていた。ベンチの下にはラジカセ。再生ボタンを押してみると「べんとらべんとら……」と唱和する声流れ出した。「べんとら」に続く言葉は「すべーすぴーぶる」と聞こえなくもなかったけれど、もっと音節が多く耳慣れない音の連なりだった。

「じきに、第一の報せが届く頃です」

背後からかけられた声にはぼくは飛び上がる。

「び、びっくりした。いらしたんですか」

「ふふっ。いましたとも。悠久の昔から」

いたずらっぽく笑う彼女が少し怖い。

「オリオンを見てくださいいな」

東の空にはまだ半分程しか姿を見せていない冬の星座の姿があった。頭上高くにはアンドロメダ。夏の終わりの、真夜中の景色。さほどの時間を置かず、クジラ座の近くに短い光が走る。

「あ……」

数分間をおいて北東の空にもう一つ。さらに数分で東の空に。どれもオリオンを輻射点にしていたように見えた。

「私たちの故郷です」

彼女がオリオンを指差す。ヴェントラ、という呟きとともに指先に燐光が灯った。ぼくは間抜けのように顎を落とす。ヴェントラ、ヴェントラ。指先ではなかった。彼女の肌の下を、ほのかな灯りが這いずり回っている。闇に慣れた目でなければ気づかなかっただろう。氷砂糖を砕いたときのような微かな灯りが人型を彩っていた。得体の知れない光を這わせ、人としての気配を失った彼女が静かに言葉を発する。

「六百四十年ほど昔、滅び去った星がありました。終末を逃れ、時間と距離をくぐり抜けてこの星に逃れ時を過ごしてきましたが、今夜は運命の第一歩が私たちに追いつきます。流星たちはかつて通ってきた通路の——名残」

両手を広げてステップを切った彼女は光の残像を残す。いや、残像ではない。まるで多重露光でもしたかのように彼女の動きを追って次々と像が増えていく。ヴェントラ、ヴェントラと唱え続ける彼女はいつしか屋上を埋め尽くした。屋上だけじゃない。増殖を続ける彼女の像の上に、頭上に、彼女のコピーが描かれ空へと伸びて行く。上へ上へと分身していくバルタン星人を目にしたら、ウルトラマンだって早々に退散しただろう。

「これは……何かのマジックですか」

ぼくは泣きそうだった。

「いいえ。あなたには感じられないかしら。GeV《ギガエレクトロンボルト》のきらめきが。ささやきが」

ささやかと、貝殻の風琴のような笑い声で周囲を満たしながら彼女は塔を築いていく。彼女の分身でできた塔を。

「天橋立《アマノハシダテ》……」

眼前に繰り広げられる不可解な光景にぼくの唇から言葉がこぼれる。

いつしかオリオンは頭上高くへ移動し、東の空が白んでいた。塔となった彼女は朝の気配とともに存在が希薄になっていき、曙光と同時に霧散してしまった。最後に「五日後に」という一言を残して。

「なんだったんだ」

ぼくは手のなかでぬるくなっていた缶ビールを握りしめる。屋上のベンチは朽ちかけてすでに座面もなく、近くに転がったラジカセは一目で動かないことがわかった。

「いったい、なんだったんだ」

街に戻ったぼくを迎えたのはちょっとした科学ニュースだった。ベテルギウス「#」
「ベテルギウス」に「傍点」が爆発する予兆を捉えたというものだ。超光速ニュートリノのシャワーを検出し、その輻射点がオリオンの一角、数年前から超新星爆発が予見されていたベテルギウスであると。

『スーパーカミオカンデによって検出された超光速ニュートリノは五日後に到達すると思われるベテルギウスの超新星爆発によるニュートリノシャワーの予兆であり——』

彼女が告げていたのはこれだったのかもしれない。

六四〇光年の彼方にあるベテルギウス。〇・〇〇二五パーセントだけ光速を超える高エネルギーニュートリノ。五・八四日の前兆。

連休を取ったばかりだったけれど、この週末にもう一度あの廃墟に行ってみるべきなのだろう。空に一際明るく輝くであろうベテルギウスを眺めながら、運命に追いつかれたという彼女たちを見送りに。HRO受信機の声に耳を傾け。

——そうだ。ビールも持っていこう。よく冷やしたのを。

銘柄は、オリオンビールがいいと思った。

「#地付き」へへへ